

十分可能である。もっとも Bischoff のハドアルドゥスをめぐる仮説の中で注目すべきなのは、先のパリ国立図書館所蔵の Ms. lat. 1794 が、もともとは S. Germain-des-Prés 所蔵のものであり、それが、1794 年国立図書館に移管されたという事実である。この背景には、写本の〈peregrinatio〉がある。Corbie 写本は、1594 年、Cl. Dupuy (Puteamus or Puteaneas) が入手した。彼は当代の碩学であり、彼の追悼文集には、J. Scaliger といった一級の知識人達が寄稿している。そして彼の子 Pierre 及び Jacques Dupuy が Bibliotheque Royale に関係していた。こうした経緯を勘案し、Courcelle, Bischoff の両仮説を結合すると、まさに写本の〈peregrinatio〉を通して、カッシオドルスの Vivarium — カールの Hofbibliothek さらに現在のヨーロッパ有力図書館所蔵の諸写本が連続性において現れてくることになってくるのである。

提 題 局地的断絶／長期的低落傾向からの回復

清水 哲 郎

古代末期のポエティウスに代表されるような学識と思索は、その後途絶えたように見えるが、やがて西欧中世において、ポエティウスらを受け継ぎ、さらにはそれら先達の肩の上に乗ってであれ、より遠方を見通すような思索の花々が咲くに至る。その狭間で、「途絶えたように見える」時期に何があったのか、実際に知の営みに何らかの断絶が起こったのか、あるいは断絶でなければ何があったのか——私は本シンポジウムのテーマをこのような問いとして捉えた。

1 断絶はあったのか—— literacy の問題

1.1 古代末期にいったん知的文化が途絶えカロリング朝において復活したのであり、その間こそ真に暗黒時代であったといった、大規模な知の断絶という考えは、根拠のないものとして現代の研究者たちがすでに排除した理解であろう¹⁾。ゲルマン諸族は、ローマ世界に侵入してきた際に、多くの場合は既成の文化を根底から壊しはしなかった。彼らもまたローマの文明に染まりつつあったのであって、イタリアやガリ

アなどに侵入して政治的支配権をとったとはいえ、支配先の現地の人材を官僚として使うなど、ある程度まで従来のやり方に倣って具体的統治をしたのである。そればかりか、現在のイタリア語、スペイン語、フランス語などが、ローマ文化を担ったラテン語を主たる起源としているという事実は、ローマ化した地域に入ったゲルマンが、言語についてすらむしろローマ文化に従ったことを示している。以下、問題となる各地および周辺状況を概観しておく（シンポジウムにおいては一覧できるように年表を使ったが、ここでは割愛せざるを得ない）。

イタリア 5世紀はじめ(410)に西ゴート王アラリクスがローマを攻略したことは、アウグスティヌスに親しむ中世哲学研究者にはよく知られている。その後アエティウスが活躍し、フン族を動かしてゲルマンを脅かす戦略をとるが、ヴァンダル族によるローマ略奪(455)の後、オドアケルにより西ローマは滅亡する(476)。やがて東ゴート族が進出、テオドリクスの支配下で、ポエティウス、ついでカシオドルスが宰相まで勤めたこと一つをとっても、征服側がローマ文化の伝統を壊すのではなく利用しようとしたことが窺われる。ゲルマンの支配者がアリウス派であったとしても、だからといって既成の教会組織が破壊され、ローマ教会が再度はじめからキリスト教化を図らねばならなかったという話も聞かない。ベネディクト修道院設立(529)もこの頃のことである。

その後、東ローマが進出し、東ゴートは大敗をきつする。続いてはロンバルド族が北イタリアを占領する(568-572)というように政治的不安定が続く、ローマ教会はそれへの対応に苦慮し、フランク族に期待するようになる。590年、グレゴリウスが教皇となり、改革が始まる。

スペイン-西ゴート族 5世紀前半に一時期ヴァンダル族が支配するが、アフリカへと進出していき(429)、ついで西ゴート族が進出し、5世紀後半には半島を支配下におくにいる。その際、やはりローマ時代以来の行政に携わる人的資源を活用している。しばらくは、正統キリスト教との軋轢があったが、やがてそれも収まる(589年、西ゴート王カトリックに改宗)――セピリアの司教イシドルスの著作活動はそういう時代のものであった。

やがて、イスラムが北アフリカから侵攻してきて(711)、短期間でイベリア半島をほぼ征服、さらには現在のフランスの一部にまで侵入していく(次項参照)。

フランク族-ガリアなど ガリアはカエサル征服以来ローマ化されていた地域で

あり、300年代の三位一体論争に同地方出身のヒラリウスが活躍するなど、キリスト教も相当広まっていた。ここに進出したフランク族は最初 Neustria に居住を許され(358)、ローマに親しい関係をもったこともあって、徐々に拡大していった。ガリア地方としてみれば、ヴァンダル族、続いて西ゴート族が進出してくるというようなことが次々と起きる中で、フランク族は北部で勢力を延ばした。メロヴィング朝のはじめ、クロヴィスがフランク王になり(481)、496年にカトリックの洗礼を受けるが、これは西ゴートなどと比べると、相当早くから正統キリスト教を受容したことになり、教会勢力から期待される世俗の権力となる。ガリアにおける教会組織は、ヒラリウス以来の流れがとくに中断したということはない。

ただし、7世紀になってダゴベルト王死後(638)、メロヴィング朝は衰退期に入るとされ、やがて教会の Synod が開かれなくなったという事実が報告されている。7世紀はアイルランド修道士が大陸に進出して伝道活動、修道院建設を各地で行い、後半にはアングロ・サクソン修道士が活動するようになる(フランク王国辺境—ゲルマニアでの活動が目立つ)。このような事実は、フランク族支配下のキリスト教自体の力が停滞していることを示すのかもしれない。

やがて、メロヴィング朝宮廷で、後にカロリング朝を開くことになる家系が台頭する(カール・マルテル時代714~)。720年、アキタニアにイスラム勢力が侵入、同地方の教会組織は壊滅する。やがてロワール川南まで迫ってくる(730)と、カール・マルテルは、支配下地域の教会の財産を取り上げて、戦費を調達、イスラムに対抗する(732、ポワティエでイスラムを破る、等)。741年、カール・マルテル没後、ピピンとカールマンが後継となり、やがて両者の下で、初期にはボニファティウスが主導したカロリング改革が始まるのである。

アイルランド ここはゲルマンが侵入した地域ではないが、見取り図を作る上で必要なので触れる。聖パトリックのアイルランド伝道(432~とされる)が有名であるが、資料によって異同が大きい。いずれにせよ5世紀半ばに、キリスト教が広まったようである。修道院が各地に建てられ(例えば6世紀前半クロナード修道院)、ここを中心に教育がされる。キリスト教以前の宗教においても知者が重んじられていた文化的伝統を受け継いでか、教育活動が盛んになり、やがては外国からの留学生も沢山くるようになった(7世紀)。

アイルランドにおける literacy 教育は、後の大陸における教育整備と関わるので、

若干述べておく。ローマの教育段階（primary-grammaticus-rhetor）と比較して見ると、アイルランドの教育は、例えばコロンバヌスの場合に報告されていることからすると、初歩的な読み書きから pueritia 段階で、liberalium litterarum et grammaticorum studia に進み、その後 scripturarum sacrarum scientia を学んだようである。このように文法と修辞が一段階に組み立てられており（文法、修辞、幾何というリストもある）、最終段階は聖書の学習であった²⁾。文法教育は、アイルランドでラテン語を母国語としない者への教育が工夫されたのであり、名詞・動詞の変化の学習がされるとか、文例がキリスト教的なものに置き換えられるようになった事例などが報告されている³⁾。

6世紀後半から7世紀、スコットランド、イングランド、そして大陸へと、ペレグリナチオの精神を持った修道士が出て行き、各地に修道院を建て、活動した。しかし、やがて活動はアングロ・サクソン系の修道士に取って代わられる。

大ブリテン島-アングロ・サクソン ローマ化したブリテンには、司教区も広がっており、キリスト教がそれなりに浸透していたが、アングロ・サクソンの侵入とともに、その支配下に入った領域の教区は少なくとも表面からは消える（450-577の時代）——つまり、この地域では確かに断絶が起きている。

これに対して、まずはアイルランド人修道士による伝道が北方から、続いてはローマから派遣された（ヒッポのではないもう一人の）アウグスティヌスらによる伝道がケント、カンタベリーを根拠地に、開始されて（597～）、アングロ・サクソンのキリスト教化が進んだ。やがて両者が出会い、軋轢が生じるが、結局はローマ系の主張が優勢となる（663、ウィトビー大宗教会議）。

キリスト教化と共に、教育も盛んになり、各地に有力な修道院付属学校ができる。そして、その流れの中で、教会史で名高い Beda、ドイツ地域の伝道、さらにはフランク王国全体のキリスト教体制の整備に力を尽くした Bonifatius、そして Alcuinus が産まれる。後二者は、大陸において、7世紀後半には、アイルランド修道士に取って代わって、アングロ・サクソンの修道士の活躍が目立ってくるが（イングランドにおいて、アイルランド系がローマ系との争いに敗れた時期以降）、その線上に位置する代表者である。

東方・その他 東ローマ、北アフリカ、およびオリエントの同時代の様子について、シンポジウムにおいては年表によって示したが、ここでは紙面の関係上、省略する。

1.2 以上のようなことから、すべて連続していたのだ、とってしまうのも早計のように思われる。以下ではとくにフランク王国に注目するが、カロリング改革期に、ピピンとカールマン、続いてカール大帝は、教会組織の再建を図り、典礼や教会法を正しく整備すること、それを聖職者たちが守るようになることを目指した。そのためには、教育の必要性があると語っている。つまり、正しくラテン語を使えない聖職者が蔓延しているという現実を指摘している。そこで、文教政策を打ち出し、教会や修道院に檄をとばしたのである。ここに、知的であるはずの階級の知的水準が決定的に下がっているという事実が認められる。

そこでこの事実を説明すべく、より小規模な断絶が指摘される。それはメロヴィング朝後半において起こったことであり、教会会議が長期間開かれなかったというような事実が裏付けとして提示される。そうだとすると、これはフランク族が支配していた領域に限定した話であろう。

だが、これもまた別の見方があり得ると私には思われる。つまり、改革はまずフランク支配下のゲルマン語を母国語とする人々の居住地域で起こる。つまりカールマンが、ボニファティウスに指導させて公会議を開くが(742/3, Concilium Germanicum)、そこで召集された司教はわずか7名(その他は改革を進めるために役に立たないと評価されたと解される)。しかし、やがてピピンがより西の方ソワッソンで開催した公会議には27名召集される。ここは崩れたラテン語が話される地域であった。これはラテン語の能力といっても、その崩れた形態の母国語に基づき、いわばその古語を学習するのと、ゲルマン語を母国語とするものが、外国語としてのラテン語を学習するのとの違いが反映している可能性がある。つまり、ロマンス語地域とゲルマン語地域との差について、留意する必要がある。なお、当時ラテン系言語を母語とする者の手によるかどうかで、文章にそれなりの差が生じているようで、それが、例えば聖像崇拜をめぐるカール指揮下の著作(*Libri Carolini*)の著者問題にも利用されている。すなわち、最新の校訂版の序によると、この著作は、ラテン系言語を母国語とする著者によるものであるとのことで、従来有力であったアルクィヌス説に代えて、テオドルフが指名されている⁴⁾。

要するに、知的断絶の指摘と従来考えられてきたことの実態が、フランク王国内の問題であったとすると、一つには、カール大帝が、その文教政策を遂行するにあたって、フランク王国以外の地から、すなわち、アングロ・サクソンの地ヨークからアル

クィヌスを、またイタリアから文法学者ピサのペトルス、歴史家パウルス・ディアコノスを、また西ゴート族のテオドルフを呼んで、その任にあたらせたということも、辻褃が合ってくる。また一つには、ラテン語教育についてアイルランド系の教師がまづは活躍したということも、崩れたラテン語—ロマンス語を母国語とするのではない人々（ゲルマン）を知的に訓練するという状況と整合的な話となってくる。つまり上述のように、アイルランドにこそ、母国語ではないラテン語の教育の伝統があったのである。カール大帝らが教育の必要性を認めたことの半分は、かつてあった学識が失われたというより、なかったものを新たに興すという課題であったのではなかろうか。

2 長期低落傾向からの脱却——思想の営みの問題

以上では、フランク王国内における literacy についての局地的かつ小規模な断絶ないしは未開拓を認めたが、そうであれば、この点を除いては、知の連続を認めることができるだろうか。literacy の連続と思想の営みとを区別して、以下では、後者に関する知の長期的低落傾向を指摘したい。

2.1 Artes Liberales について：カシオドルスとイシドルス

そもそもカシオドルス、イシドルスにおいて（なるほど彼らは博識の誉れ高いのではあるが）、知の低落を見出さざるを得ないのではないか。私は、彼らの *Institutiones* や *Etymologiae* を念頭においている (PL 70, 1149ff.; PL 82, 73ff.). — 彼らの別の著作には、もっと優れた知性の発露があるのではという疑問はもっともなことである。例えば、イシドルスがその知的本領を発揮したのは、*Etymologiae* においてというよりは、聖書解釈にかかわるような諸著作であったといえるかもしれない。だが今は、そもそも上に挙げたような著作をも意義あるものとして遺したところに、知の不活性化を指摘するにとどめ、聖書解釈等における知的活動の評価は、この分野の研究の進展を待ちたい。

さて、上記著作はともに自由学芸の紹介を含んでいるが、ごく手短な、辞書的説明にとどまるものである。ポエティウスが正確にラテン語訳し、かつ注解を丁寧につけようとしたことと比べると、全く知のあり方が違う。確かにポエティウスはその注解に関して、先行注解に相当依拠しているかもしれない。が、そうであっても、それを辿り納得しながら書こうとしていたのではないだろうか。だが、カシオドルスやイシ

ドルスの著作はおよそそういうものではない。加えて、イシドルスは多くの部分をカシオドルスの対応する部分の記述をただ引き写している。文法学や弁証学の記述をしていても、言語や論理について自覚的に考えたという形跡が認められない（自覚的に考えていたとしたら、各部分の記述が互いに齟齬をきたしているとか、曖昧な説明にとどまっていることに、どうして我慢できたのだろうか）。

この観点でいえば、ポエティウス以降カールの宮廷に至るまで、知的ディスカッションの形跡を見出すことはできない。カシオドルスもイシドルスもそれなりに学識ある人ではあっただろう。だが、いずれも単発の知性であって、その周辺に何かを論じ合った人々がいたというようなことではなさそうだ。レランス修道院（5世紀前半に設立）等で、確かに教育がされ、一定の学識をもった人間を世に送り出していただろう。だが、それはただ知的遺産を受け継ぐというだけのことだったのではないだろうか。

2.2 アルクィヌスの思索

それに比し、アルクィヌスおよびその周辺の知的サークルには、ディスカッションの形跡が見られる。自分なりに考えた跡がある。その考え自体は決して高レベルのものではなかったにせよ、ただ考えなしに受け継ぐのとは違う。この点については、Marenbon に、知的サークルが遺した写本に基づく研究があるが⁵⁾、私も以前に、アルクィヌスの *Artes Liberales* 教科書作りの過程、およびフレデギススの無の存在についての議論を分析したことがあるので、これを簡単に振り返っておこう⁶⁾。

アルクィヌスは、自由学芸諸学科に関する教科書の著作をいくつか残している。『弁証学 *De dialectica*』はその一つであり、カール大帝とアルクィヌスの対話という形で書かれている (*PL* 101, 949-976)。それらの相当部分は、上述のカシオドルス、イシドルス、またマルティアヌス・カペラを引き写した（ただし対話形式に直して）ものであるが、ある部分はアルクィヌス独自のものと目される。例えば、カテゴリー論⁷⁾は 先行諸著に比して量的にも内容が大幅に増えており、偽アウグスティヌスの『10のカテゴリー』との密接な関係が指摘されるものとなっている⁸⁾。また、関係のカテゴリーに関連して、神学（三位一体論）への応用に言及し、論争における有効性を指摘するなど、弁証学教育の目的を示唆する文言も見受けられる。

命題論については、私見によれば、アルクィヌスは教育カリキュラムという観点で、

ことに文法学との関係に配慮をしている。すなわち、文法学においても名詞、動詞、文について各々に定義が与えられているが、それを学習した学生が、やがて弁証学の命題論においてアリストテレスの文言に基づくそれらへの定義に出会った時に、両者の定義が齟齬をきたしていることによって混乱してはいけない、という配慮である。例えば、後者によれば名詞の斜格や、「非人間」などの「無限定な infinitum」名前は、「名前・名詞 nomen」ではないとされるが、前者によればそれらはもちろん名詞に違いないのである。また、アリストテレス的には、「文 oratio」はそれを適切に分割すれば、それらの部分が表示の働きを帯びるようなものであるが、そうなると「白い馬」も文だということになる。しかし、文法学的には、「白い馬」だけで、滑ったか転んだかが語られないものは文ではない。

アルクィヌスは、まず、なぜこのような文法学ですでに説明されたようなことが、弁証学において蒸し返されているのかに疑問を持ち、それが弁証学を構成する諸部門の順序を変更するという結果になったと推測される。すなわち、先行書においても、また以降も、イサゴゲー、カテゴリー論、命題論、そして三段論法にかかわる部門と続く順序を保っているのに対して、アルクィヌスは命題論を弁証学の末尾に移動させている。これによって学生は、「表示の働きを帯びた音声」というような理解にとらわれて横道に入らずに、「正しく議論する技術」としての弁証学の主要部分をまずは学び、その後、「単純な」文法学に比して「精密さ (subtilitas)」を備えた弁証学による名前等の定義に取り組むという道を進めるからであろう。

また、名詞・名前や文の定義については、アルクィヌスは、文法学に合わせてアリストテレス—ポエティウスの文言を強引に換骨奪胎するという道をとった。これはアリストテレス『命題論』理解として言えば暴挙というしかないが、しかしこのような作業をすることにおいてアルクィヌスが言語について文法学や弁証学において自ら細かく考えつつ教科書を作成していたこと、その結果、両者の齟齬についてその後12世紀になるまで公の議論にならなかったような論点をすでに意識するに到っていたことを示している。また上記の強引な換骨奪胎の結果、アルクィヌスは、名前の表示作用 (significatio) について、〈単独で何かを表示する〉働きと、〈文の中に置かれた場合に何かを表示する〉働きとを区別するという説明をすることになったが、これは12世紀後半以降の代表 (suppositio) 理論を連想させる考えである。なお、名前が単独で行う表示の対象についての説明等からは、カテゴリー論に基づく世界構造に

ついでに認識を、命題論にも持ち込むというやり方がうかがわれ、文法学とカテゴリー論を基礎にするという方針が全体として見えてきもする。

以上、アルクィヌスには、カシオドルスやイシドルスには見られなかった、自ら思索する態度が確かにあることを指摘した。ただし、古代末期以来の低落傾向は、カロリング・ルネサンスとともに上昇傾向になったとはいえ、全く回復したという状態からは程遠いと言わざるをえない。11 後半ないし 12 世紀までいかないとボエティウスのレベルまで回復したとは言えないのではないだろうか。

おわりに——知的状況改善の原因

カロリング改革の時代に literacy という意味での知の回復が目指されたばかりではなく、思索する態度が復活し始めたのは何故だろうか——私はここで、論争が刺激となった、という作業仮説を提案したい。

実際、フランク王国においては、カールの時代に論争が起こっている。アルクィヌスの神学的著作の相当部分は三位一体論がテーマとなっており、東との対決としての *filioque*、西に興った adoptionist との対決にかかわっている。また、当時東で盛んになっていた聖像崇拝問題は、カール指揮下での論争ともなった。すでにピピンの時代に、王は聖像崇拝に関してフランクの司教たちを公開論争に参加させている (767)。神学論争に参加するということは、確かに当時の literacy 教育の目的である教会法や聖書についての学識を基礎にしていることだろうが、論争はそれにとどまらない知的刺激になる。さらにカールは、論争相手と渡り合ってこれを論破できるような知的才能を求めた。すなわち、第二ニカイア会議 (787) が聖像崇拝に関して出した結論 (とカールが理解ないし誤解したもの) は、カールにとっては我慢ならぬものであり、これに対決する論争書 (*Libri Carolini*) を配下の学者 (テオドルフらしい) に命じて執筆させたが、命じたにとどまらず、内容になみなみならぬ関心を寄せていることが、写本から明らかになっている⁹⁾。このような論争上の必要が、知的刺激になったのではないだろうか。

アルクィヌス周辺にも仲間内の議論をうかがわせるところがある。例えば、ラバヌスは、魂がどの時点で創られるかについて、アルクィヌスやフレデギススの見解と異なる議論をしている¹⁰⁾。また、「無からの創造」における「無」をどう理解するかについて、エリウゲナは二つの立場を紹介し、論じているが、すでにフレデギススにそ

の論争に通じる考えが見出される¹¹⁾。こうしたことは、対異端のような敵対的論争ではないが、仲間内の論争があったことを示している¹²⁾。

教会の典礼を正しく行うための聖職者の知、また統治を実行するための官吏の知は、それだけでは思索し、論争する知にはならない。後者が育つには、それを必要とする環境が要る。カールの時代にそれが生じ、あるいはカール自ら論争を惹き起こした。こうした論争もまた彼の政治に含まれるものだった——このことを、知的回復が始まった要因として挙げておきたい¹³⁾。

注

- 1) Giles Brown, Introduction: the Carolingian Renaissance, in: Rosamond McKitterick, ed., *Carolingian Culture: emulation and innovation*, Cambridge, 1994., pp. 1-51.
- 2) T. M. Charles-Edwards, The context and uses of literacy in early Christian Ireland, in: Huw Pryce, *Literacy in Medieval Celtic Societies*, Cambridge, 1998.
- 3) Vivien Law, The study of grammar, in: McKitterick, ed., *op. cit.* pp. 88-110.
- 4) *Opus Caroli Regis contra Synodum (Libri Carolini)* (Monumenta Germaniae Historica: Leges 4, Concilia; t. 2, suppl. 1), hrsg. v. A. Freeman, Hannover, 1998.
- 5) Marenbon, John, *From the circle of Alcuin to the school of Auxerre*, Cambridge, 1981.
- 6) 清水哲郎, アルクィヌスとフレデギスス——文法学・論理学・神学をめぐる, 『パトリスティカ』2号1995, 3-18頁. SHIMIZU Tetsuro, Alcuin's theory of signification and system of philosophy, *DIDASCALIA*, 2: 1-18 (1996).
- 7) 「カテゴリー論」「命題論」等に『 』なしで言及する際には、弁証学を構成する章であって、同名のアリストテレスの著作に由来している部分を指している。
- 8) L. Minio-Paluello は, *Aristoteles Latinus*, I 1-5: *Categoriae* pp. 189-192 に, 該当部分の校訂を載せ, かつ『10のカテゴリー』との関係について説明を加えている (LXXVII-XCVI).
- 9) 新しい校訂版(注4参照)には, 欄外にカール自身が「うまい!」「これは重要!」といった書き込みをしている様子が再現されている。
- 10) アルクィヌスとフレデギススは, 人の魂を最初に創られたものとして挙げている (PL 100, 519 B; PL 105, 753 A) が, ラバヌスは, 個別の妊娠のある時期に個別に魂が創造されるとしている (PL 110, 1112 B-C).
- 11) Johannes Scotus, *Periphyseon* III, chs. 5-23. (Sheldon-Williams, ed., pp. 60-188). なお, 注6の諸拙論参照。
- 12) Marenbon, *op. cit.*, もアルクィヌス周辺の議論について証言している。

- 13) なお シンポジウム後に、参加されていた知泉書館の小山氏より、次の書籍を紹介していただいた。これは本報告全般に深く関わる良書であると思う。ピエール・リシェ(岩村清太訳)『ヨーロッパ成立期の学校教育と教養』(知泉書館 2002 年)。

意見

矢 内 義 顕

今回の中世哲学会シンポジウムは、これまでほとんど取り扱われることのなかったテーマ「古代末期からカロリング・ルネッサンスへ——知の断絶か連続か」を取り上げた点で、非常に興味深いシンポジウムであったと思う。野町啓氏の提題は、ポエティウスの受容と影響に焦点を絞ってその写本の伝承を丹念に辿り、清水哲郎氏の提題は、古代末期からカロリング朝にかけての知の在り様を俯瞰するものであった。

さて、古代末期においてどのような問題が残され、それらがカロリング朝においてどのように、受容され、発展させられたのか、さらに以後の中世において、それらがどのように受容され、発展させられたのかということは、重要な問題であると思われる。

例えば、秘跡論、とりわけ聖餐論の問題を取り上げてみよう。古代末期の聖餐論として代表的なものは、アンブロシウスの *De sacramentis* である。しかし、この聖餐論に関して中世における最初のまとまった論考は、9世紀のパスカシウス・ラドベルトゥスとラトラムヌスなどの論争を通じて生れる。両者共に *De corpore et sanguine Domini* という表題をもつ著作を残し、その中で *substantia* が用いられた点は重要であろう。さらに11-12世紀においては、ランフランクスとベレンガリウスの論争に代表される熾烈な聖餐論争が繰り広げられるが、そこでは9世紀とは比較にならないほど文法学、論理学、哲学的概念が活用される。そして、この問題が再燃するのは、16世紀の宗教改革時代である。

つまり、アンブロシウス以後ほとんど取り上げられることのなかった問題が、9世紀に初めて取り上げられ、以後の中世キリスト教の知的世界にとって決定的な意味をもつのである。

聖餐論を例としてあげたが、むしろ、三位一体論や予定論などについてもカロリン